

国語

I

出典

森田真生『計算する生命』（終章 計算と生命の雑種）（新潮社）

解答

問 1 1 ⑥
問 2 ア ③
イ ⑤
ウ ①
エ ②
オ ①
カ ⑤

問 3 A ④
B ③
C ②
D ⑤

問 4 ④

問 5 ②

問 6 ②

問 7 ③

問 8 ④

問 9 ③

解説

問 4 傍線 A を含む段落の二段落後冒頭の「認知主体の外から、認知主体を見晴らす観察者の視点に立つ」と、傍線 A 直

前の「カエルを外から観察する視点」とが対応している。この「視点」に立つときは、「『入力——情報処理——出力』という他律的なモデル」が成立している。カエルの例で言うところ、カエルがハエの姿を捉えることが「入力」であり、その存在を心のうちに描いて知覚することが「情報処理」、ハエを捕食するのが「出力」ということである。

問5 空欄Ⅰの直後の「他律系ではなく、みずからの活動のパターンに規制された、自律的なシステム」から考える。
「外的な刺激をきっかけ」として起きる反応」という意味になる②が適切。

問6 傍線Bを含む段落の三つ前の段落に「自律的な生命と、自動的な計算の間には、依然として大きな溝が広がっている」とあり、これが傍線Bの「その間隙」のこと。そしてその次の段落冒頭で「この間隙を性急に埋めようとするとき、生命を計算に近づけようとする結果にもなりかねない」とあり、傍線Bまでで「計算と生命の溝」を埋める際、「計算機が人間に近づいていく」「人間が計算機に近づいていく」という二つの可能性があることを示している。これを説明しているのは②である。

問7 最終段落冒頭に「状況に即座に対応すべき場面で思索に耽る…『哲学者サッカー』はコミカルに描き出す」とある。対応すべき場面で思索に耽って対応しないことを説明しているのは、③である。

①「知性だけではサッカーをすることはできない」が不適。

②「慎重さが現代人の特性」ではない。

④「哲学者」が「危機に直面した時に行動を起こすことはできない」とは言っていない。

⑤「知性は不要」とは述べていない。

問8 直前の「こうした」に着目する。「脳内だけでなく環境の情報を生かして判断や行為を生成していく拡張性」などを指している。

問9 空欄Ⅱを含む段落の「黎明期の認知科学…計算機と同様、他律的に作動する」に合致している③が正解。

①「『自律性』をもったシステムを人間が完成させること」が「不可能」だとは言っていない。

②空欄Cと空欄ウを含む段落に「神経細胞の活動パターンを見つけ出す…壁にぶち当たった…素直な対応が見つからなかった」とある。

④「認知主体に対する特権的な観察者の視点が不可欠」とは言っていない。

⑤「自律性を持つシステム」が「環境問題を根本的に解決する」とはしていない。

II

出典

『十訓抄』へ上 第一 人に恵を施すべき事 一ノ六

解答

問1 アー③ イー⑤ ウー② エー① オー④
問2 いー② ろー① はー⑤

問3 ④

問4 ③

問5 ①

問6 ⑤

問7 アー③ イー②

問8 ②

問9 ④

問10 ③

解説

問2 い、「よそおひ」は名詞で、外観を整えること、
「いかめし」は形容詞で、立派である、威厳があるの意。「城」をどのように造ったのか考えること。

ろ、「あさり求む」は、あちこち探すの意。

は、「な」は陳述の副詞で、「そ」と呼応して、∴してはいけない∴という禁止の意味になる。

問3 傍線Aより前の「心あれば命を惜しむこと、人に変はらず。∴われ、敵に攻められて、からきめをみる」に着目する。自分が敵に攻められ、命も危うい状況で、蜘蛛に殺されようとしている蜂を放してやったことから考えるとよい。

問5 傍線Bの後で「昼の蜘蛛の網にからまれつる蜂は、おのれに待る」と答えている。これは「汝が命を助けむ。必ず思ひ知れ」と言われて助けてもらったことに応えたものである。

問6 「しつらふ」は、用意する、準備するの意。見た夢の通りに準備したのであるから、その内容を正確に押さえること。夢で蜂は「もとの城のほどに、仮屋を造りて、なりびさこ、壺、瓶子、かやうの物を多く置き給へ」と言っている。

問8 傍線Dの直前に「蜂ども仮屋より雲霞のごとく涌き出で∴目鼻ともなく、はたらく所ごとに、刺し損じ」とある。大量の蜂に刺されたことに触れている選択肢は②だけである。

問9 後ろから三段落目の「敵三百余騎、時のほどに、たやすくうち殺してければ、おそれなく、もとのあとに返りぬにけり」という内容に合致している④が正解。

①「前世で積んだ戒力が足りなかった」とは思っていない。

②「さるべきゆゑあり（∥そうすべき理由がある）」と答えただけで、詳しくは説明していない。

③「不審に思った敵を呼び寄せることができた」わけではない。

⑤後ろから二段落目に「堂を建てなどして、年ごとに蜂の忌日とて、恩を報じけり」とある。祭っていたのは「死にたる蜂」である。